

谷崎潤一郎 III

現代日本文学館

18

小林秀雄 編集

文藝春秋

現代日本文学館 18
谷崎潤一郎 3

昭和四十三年四月一日第一刷

著者 谷崎潤一郎

発行者 上林吾郎

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三
電話東京(二六五)一二一一

振替東京七八七四三

印刷 凸版印刷

製本 凸版製本

定価 四八〇円

Printed in Japan

本全集の本文は現代表記にいたしました

目次

鍵 5

蓼喰う虫 94

吉野葛 207

蘆刈 241

少将滋幹の母 274

月と狂言師 356

過酸化マンガンの夢 369

老後の春 380

夢の浮橋 396

注解 431

解説 井上靖 465

年譜 470

挿画 桑田雅一「鍵」

小出檣重「蓼喰う虫」

三輪晃勢「吉野葛」

福田平八郎「蘆刈」

小倉遊亀「少将滋幹の母」

奥村土牛「夢の浮橋」

伝記は「谷崎潤一郎(一)」に収録

谷崎潤一郎
(三)

一月一日。………僕ハ今年カラ、今日マデ日記ニ記スコトヲ躊躇ちゆうちゆうシテイタヨウナ事柄ヲモアエテ書キ留メルヲニシタ。僕ハ自分ノ性生活ニ関スルヲ、自分ト妻トノ関係ニツイテハ、アマリ詳細ナヲハ書カナイヨウニシテ来タ。ソレハ妻ガコノ日記帳ヲ秘ひカニ読ンデ腹ヲ立テハシナイカトイウヲ恐レテイタカラデアッタガ、今年カラハソレヲ恐レヌヲニシタ。妻ハコノ日記帳ガ書齋ひやうノドコノ抽出ひだしニハイッテイルカラ知ッテイルニ違イナイ。古風ナ京都ノ舊家きゅうかニ生マレ封建的ナ空氣ノ中ニ育ッタ彼女ハ、今日モナオ時代オクレナ舊道徳ヲ重ンズル一面ガアリ、或ル場合ニハソレヲ誇リトスル傾向モアルノデ、マサカ夫ノ日記帳ヲ盗ミ読ムヨウナヲハシソウモナイケレドモ、シカシ必ズシモソウトハ限ラナイ理由モアル。今後従来ノ例ヲ破ッテ夫婦生活ニ関スル記載ガ頻繁ひんぱんニ現ワレルヨウニナレバ、果シテ彼女ハ夫ノ秘密ヲ探ロウトスル誘惑ニ打チ勝ち得ルデアロウカ。

彼女ハ生マレツキ陰性デ、秘密ヲ好ム癖ガアルノダ。彼女ハ知ッテイルヲデモ知ラナイ風ヲ装イ、心ニアルヲ容易ニ口ニ出サナイノガ常デアルガ、悪イコトニハソレヲ女ノ嗜ミデアルトモ思ッテイル。僕ハ、日記帳ヲ入レテアル抽出ノ鍵かぎハイツモ某所ニ隠シテアルノダガ、ソシテ時々ソノ隠シ場所ヲ変エテイルノダガ、詮索せんさく奸かんキノ彼女ハ事ニヨルト過去ノアラユル隠シ場所ヲ知ッテシマッテイルカモ知レナイ。モットモソノ面倒ヲシナイデモ、アンナ鍵かぎハイクラデモ合イ鍵ヲ求メルヲガデキヨウ。………僕ハ今「今年カラハ読マレルヲ恐レヌヲニシタ」ト云ッタガ、考エテミルト、実ハ前カラソノナニ恐レテハイナカッタノカモ知レナイ。ムシロ内々読マレルヲ覚悟シ、期待シテイタノカモ知レナイ。ソレナラバナゼ抽出ニ鍵ヲ懸ケタリマタソノ鍵ヲアチラコチラハ隠シタリシタノカ。ソレハ或ハ彼女ノ搜索癖ヲ満足サセルタメデアッタカモ知レナイ。ソレニ彼女ハ、モシ僕ガ日記帳ヲ故意ニ彼女ノ眼ニ触レヤスイ所ニ置ケバ、「コレハ私ニ読マセルタメニ書イタ日記ダ」ト思イ、書イテアルヲ信用シナイカモ知レナイ。ソレドコロカ、「ホントウノ日記ガモウ一ツドコカニ隠シテアルノダ」ト思ウカモ知レナイ。………郁子いくこヨ、ワガ愛スルイアルカドウカヲ知ラナイ。僕ガオ前ニソノ盗ミ読ミシツツオ前ハ「人ノ書イタモノヲ盗ミ読ミナドイタシマセン」ト答エルニキマッテイルカラ、聞イタトコロデ仕方ガナイ。

ダガモシ読ンデイルノデアッタラ、決シテコレハ偽リノ日記デナイヲ、コノ記載ハスベテ真実デアルヲ信ジテ欲シイ。イヤ、疑イ深イ人ニ向カッテコウイウヲ云ウトカエッテ疑イヲ深クサセル結果ニナルカラ、モウ云ウマイ。ソレヨリコノ日記ヲ読ンデサエクレバソノ内容ニ虚偽ガアルカ否カハ自然明ラカニナルデアロウ。

モトヨリ僕ハ彼女ニ都合ノヨイヲバカリハ書カナイ。彼女ガ不快ヲ感ズルデアロウヨウナ、彼女ノ耳ニ痛イヨウナヲ憐カラス書イテ行カネバナラナイ。モト／＼僕ガコウイウヲ書ク氣ニナッタノハ、彼女ノアマリナ秘密主義、——夫婦ノ間デ閨房ノヲ語リ合ウサエ恥ズベキトシテ聞キタガラズ、タマ／＼僕ガ猥談メイタ話ヲシカケルトタチマチ耳ヲ蔽ウテシマウ彼女ノイワユル「身嗜ミ」、アノ偽善のナ「女ラシサ」、アノワザトラシイオ上品趣味ガ原因ナノダ。連レ添ウテ二十何年ニモナリ、嫁入り前ノ娘サエアル身デアリナガラ、寢床ニハイッテモイマダニタダ黙々ト事ヲ行ナウダケデ、ツイゾシンミリトシタ睦言ヲ取リ交ソウトシナイノハ、ソレデモ夫婦トイエルデアロウカ。僕ハ彼女ト直接閨房ノヲ語リ合ウ機会ヲ与エラレナイ不滿ニ堪エカネテコレヲ書ク氣ニナッタノダ。今後ハ僕ハ、彼女ガコレヲ實際ニ盗ミ読ミシテイルト否トニカカワラズ、シテイルモノト考エテ、間接ニ彼女ニ話シカケル氣持デコノ日記ヲツケル。

何ヨリモ、僕ガ彼女ヲ心カラ愛シテイルヲ、——コノ

「ハ前ニモ度々書イテイルガ、ソレハ偽リノナイヲデ、彼女ニモヨク分カッテイルト思ウ。タダ僕ハ生理的ニ彼女ノヨウニアノ方ノ慾望ガ旺盛デナク、ソノ点デ彼女ト太刀打ちデキナイ。僕ハ今年五十六歳（彼女ハ四十五ニナッタ筈ダ）ダカラマダソシンナニ衰エル年デハナイノダガ、ドウイウ訳カ僕ハアノコニハ疲レヤスクナッテイル。正直ニ云ッテ、現在ノ僕ハ週ニ一回クライ、——ムシロ十日ニ一回クライガ適當ナノダ。トコロガ彼女ハ（コンナヲ露骨ニ書イタリ話シタリスルヲ彼女ハ最モ忌ムノデアル）腺病質デシカモ心臓ガ弱イニモカワラズ、アノ方ハ病的ニ強イ。サシアタリ僕ガハナハダ当惑シ、參ッテイルノハ、コノ一事ナノダ。僕ハ夫トシテ、彼女二十分ノ義務ヲ果タシ得ナイノハ申シ訳ガナイケレドモ、ソウカト云ッテ、彼女ガソノ不足ヲ補ウタメニ、モシ仮リニ、——コンナヲ云ウト、私ヲソシンミダラナ女ト思ウノデスカト怒ルデアロウガ、コレハ「仮リニ」ダ、——他ノ男ヲ拵エタトスルト、僕ハソレニハ堪エラレナイ。僕ハソシンナ假定ヲ想像シタダケデモ嫉妬ヲ感ズル。ノミナラズ彼女自身ノ健康ノヲ考エテモ、アノ病的ナ慾求ニ幾分ノ制御ヲ加エタ方ガヨイノデハアルマイカ。……僕ガ困ッテイルノハ、僕ノ体力ガ年々衰エヲ増シツツアルヲ。近頃ノ僕ハ性交ノ後デ実ニ非常ナ疲労ヲ覺エル。ソノ日一日グッタリトシテ物ヲ考エル氣力モナイクライニ。……ソレナラ僕ハ彼女トノ性交ヲ嫌ッテイルノカト云ウト、事實ハソレノ反対ナ

ノダ。僕ハ義務ノ觀念カラ強^しイテ情慾ヲ驅リ立テテイヤイ
ヤ彼女ノ要求ニ応ジテイルノデハ断ジテナイ。僕ハ幸力不
幸カ彼女ヲ熱愛シテイル。ココデ僕ハ、イヨイヨ彼女ノ忌
避ニ触レル一点ヲ発カネバナラナイガ、彼女ニハ彼女自身
全ク氣ガ付イテナイトコロノ或ル独得ナ長所ガアル。僕
ガモシ過去ニ、彼女以外ノ種々ノ女ト交渉ヲ持ツタ経験ガ
ナカッタナラバ、彼女ダケニ備ワツテイルアノ長所ヲ長所
ト知ラズニイルデモアロウガ、若カリシコロニ遊ビヲシタ
ノアル僕ハ、彼女ガ多クノ女性ノ中デモ極^めメテ稀^{まれ}ニシ
カナイ器具ノ所有者デアアルヲ知ツテイル。彼女ガモシ昔
ノ島原^{シマハラ}ノヨウナ妓楼^{きろう}ニ売^うラレテイタトシタラ、必スヤ世間
ノ評判ニナリ、無数ノ嫖客^{ひょうかく}ガ競^きッテ彼女ノ周囲ニ集マリ、
天下ノ男子ハ悉^{ことごと}ク彼女ニ悩殺^{なうころ}サレタカモ知レナイ。(僕ハ
コンナヲ彼女ニ知ラセナイ方ガヨイカモ知レナイ。彼女
ニソウイウ自覚ヲ与エルヲハ、少ナクトモ僕自身ノタメニ
不利カモ知レナイ。シカシ彼女ハコレヲ聞イテ、果シテ
自ラ喜ブデアロウカ恥ジルデアロウカ、或ハマタ侮辱ヲ
感ジルデアロウカ。多分表面ハ怒^{おこ}ッテ見セナガラ、内心
ハ得意ニ感ジルヲ禁ジ得ナイノデハナカロウカ)僕ハ彼
女ノアノ長所ヲ考エタダケデモ嫉妬^{しつと}ヲ感ズル。モシモ僕以
外ノ男性ガ彼女ノアノ長所ヲ知ツタナラバ、ソシテ僕ガソ
ノ天与ノ幸運ニ十分酬^{むか}イテナイヲ知ツタナラバ、ドン
ナヲ起コルデアロウカ。僕ハソレヲ考エルト不安デモア
リ、彼女ニ罪深^{つみふか}イヲシテイルトモ思イ、自責ノ念ニ堪エ

ラレナクナル。ソコデ僕ハイロイロナ方法デ自分ヲ刺戟^{しげき}シ
ヨウトスル。タトエバ僕ハ僕ノ性慾点——僕ハ眼ヲツッ
ッテ眼^{まなこ}ノ上ヲ接吻^{せつぶん}シテモラウ時ニ快感ヲ覚エル、——
ヲ彼女ニ刺戟シテモラウ。マタ反対ニ僕ガ彼女ノ性慾点
——彼女ハ腋^{わき}ノ下ヲ接吻シテモラウヲ好ムノデアル、
——ヲ刺戟シテ、ソレニヨッテ自分ヲ刺戟シヨウトスル。
シカルニ彼女ハソノ要求ニサエアマリ快クハ応ジテクレナ
イ。彼女ハソウイウ「不自然ナ遊戲」ニ耽^ふルヲ欲セス、
アクマデモオーソドックスナ正攻法ヲ要求スル。正攻法ニ
到達スル手段トシテノ遊戲デアアルヲ説明シテモ、彼女ハ
ココデモ「女ラシイ身嗜^みミ」ヲ固守シテソレニ反スル行為
ヲ嫌^{きら}ウ。彼女ハマタ僕ガ足ノ *feet* デアルヲ知ッテイ
ナガラ、カツ彼女ハ自分ガ異常ニ形ノ美シイ足(ソレハ四
十五歳ノ女ノ足ノヨウニハ思エナイ)ノ所有者デアアルヲ
知ッテナガラ、イヤ知ッテイルガユエニ、メツタニソノ
足ヲ僕ニ見セヨウトシナイ。真夏ノ暑イ盛リデモ彼女ハ大
概足袋^{たびふく}ヲ穿^はイテイル。セメテソノ足ノ甲ニ接吻サセテクレ
ト云ツテモ、マア汚^{きた}ナイトカ、コンナ所ニ触ルモノデハア
リマセントカ云ツテ、ナカナカ願イヲ聴イテクレナイ。ソ
レヤコレヤデ僕ハ一層手ヲ施シヨウガナクナル。……正
月早々愚痴ヲナラベル結果ニナツテ僕モイササカ恥ズカシ
イガ、デモコンナヲモ書イテオク方ガヨイト思ウ。明日
ノ晩ハ「ヒメハジメ」デアアル。オーソドックスヲ好ム彼女
ハ毎年ノ吉例ニ従イ、必スソノ行事ヲ厳肅ニ行ナワナケレ

バ承知シナイデアロウ。……

一月四日。……今日私は珍しい事件に出遇った。三ヶ日の間書斎の掃除をしなかったもので、今日の午後、夫が散歩に出かけた留守に掃除をしないと思ったら、あの水仙の活けてある一輪挿しの載っている書棚の前に鍵が落ちていた。それは全く何でもないことなのかも知れない。でも夫が何の理由もなしに、ただ不用意にあの鍵をあんな風に落としておいたとは考えられない。夫は実に用心深い人なのだから。そして長年の間毎日日記をつけていながら、かつて一度もあの鍵を落としたことなかったのだから。……私は勿論夫が日記をつけていることも、その日記帳をあの小机の抽出しに入れて鍵をかけていることも、そしてその鍵を時としては書棚のいろ／＼な書物の間に、時としては床の絨緞の下に隠していることも、とうの昔から知っている。しかし私は知ってよいことと知ってはならないこととの區別は知っている。私が知っているのはあの日記帳の所在と、鍵の隠し場所だけである。決して私は日記帳の中を開けて見たりなんかしたことはない。だのに心外なことには、生来疑い深い夫はわざ／＼あれに鍵をかけたなりその鍵を隠したりしなければ、安心がならなかったのであるらしい。……その夫が今日その鍵をあんな所に落として行ったのはなぜであろうか。何か心境の変化が起こって、私に日記を読ませる必要を生じたのであろうか。そして、正面から

私に読めと云っても読もうとしないであろうことを察して、「読みたければ内証で読め、ここに鍵がある」と云っているのではなからうか。そうだとすれば、夫は私がこの昔から鍵の所在を知っていたことを、知らずにいたということになるのだろうか？ いや、そうではなく、「お前が内証で読むことを僕も今日から内証で認める、認めて認めないふりをしているやう」というのだろうか？……

まあそんなことはどうでもよい。かりにそうであったとしても、私は決して読みはしない。私は自分でここまでと極めている限界を越えて、夫の心理の中にまでは入り込んで行きたくない。私は自分の心の中を人に知らせることを好まないように、人の心の奥底を根掘り葉掘りすることを好まない。ましてあの日記帳を私に読ませたがっているとしたら、その内容には虚偽があるかも知れないし、どうせ私に愉快なことばかり書いてある筈はないのだから。夫は何とでも好きなことを書いたり思ったりするがよいし、私は私でそうするであらう。実は私も、今年から日記をつけ始めている。私のように心を他人に語らない者は、せめて自分自身に向かつて語って聞かせる必要がある。ただし私は自分が日記をつけていることを夫に感づかれるようなマはやらない。私はこの日記を、夫の留守の時を窺って書き、絶対に夫が思いつかない或る場所に隠しておくことにする。私がこれを書く気になった第一の理由は、私には夫の日記帳の所在が分かっているのに、夫は私が日記をつけ

ていることさえも知らずにいる、その優越感がこの上もなく楽しいからである。……

一昨夜は年の始めの行事をした。……あゝ、こんなことを筆にするとは何という恥ずかしきであろう。亡くなった父は昔よく「慎^{おごち}独^も」ということを教えた。私がこんなことを書くのを知ったら、どんなにか私の墮落を歎^{なげ}くであろう。……夫は例により歡喜の頂天に達したらしいが、私はまた例により物足りなかった。そしてその後の感じがたまらなく不快であった。夫は彼の体力が続かないのを恥じ、私にすまないということを毎度口にする半面、夫に対して私が冷静すぎることを攻撃する。その冷静という意味は、彼の言葉に従えば私は「精力絶倫」で、その方面では病的に強いけれども、私のやり方はあまりにも「事務的」で、「ありきたり」で、「第一公式」で、変化がないというのである。平素何事につけても消極的で、控え目である私^{わが}が、あのことにだけは積極的であるにもかかわらず、二十年来常に同じメソッド、同じ姿勢でしか応じてくれないというのである。——そのくせ夫はいつも私の無言の挑^{もよほ}みを見逃^{みのが}さず、私の示すほんの僅^{わずか}かな意志表示にも敏感で、直ちにそれと察^{さつ}しるのである。それは或は、私の頻繁^{ひんぱん}すぎる要求に絶えず戦々兢兢^{せんぜんせいせい}としてゐる結果、かえってそんな風になるのかも知れない。——私は実利一点張りで、情味がないのだそうである。僕がお前を愛している半分も、お前は僕を愛していないと、夫は云う。お前は僕を單なる

必需品としか、——それも極めて不完全な必需品としか考えていない、お前がほんとうに僕を愛しているなら、もっと熱情があつてもよい筈だ、いかなる僕の註文^{ちゅうもん}にも応じてくれる筈だと云う。僕が十分にお前を満足させ得ない一半の責めはお前にある、お前がもっと僕の熱情をかき立てるようにしてくれれば、僕だってこんなに無力ではない、お前は一向そういう努力をしようとせず、自ら進んでその仕事に僕と協力してくれない、お前は食いしんぼうのくせに手を拱^{こまぬ}いて据^ゐえ膳^{ぜん}の箸^{はし}を取ることばかり考えていると云い、私を冷血動物で意地の悪い女だとさえ云う。

夫が私をそういう眼で見えるのも一往無理のないところがある。だけど私は、女というものはどんな場合にも受け身であるべきもの、男に対して自分の方から能動的に働きかけてはならないもの、という風に、昔氣質^{むかしきあひ}の親たちからしつけられて来たのである。私は決して熱情がないわけではないが、私の場合、その熱情は内部に深く沈潜する性質のもので、外に発散しないのである。強^{つよ}いて発散させようとするればその瞬間に消えてなくなってしまうのである。私の青白い熱情で、燃え上がる熱情ではないということを、夫は理解してくれない。……このごろになって私がつくづく感じることは、私と彼とは間違つて夫婦になつたのではなかつたか、ということである。私にはもっと適した相手があつたであらうし、彼にもそうであつたろうと思う。私と彼とは、性的嗜好^{せいしきう}が反撥^{はんぱつ}し合つてゐる点が、あまりにも

多い。私は父母の命ずるままに漫然とこの家に嫁ぎ、夫婦とはこういうものと思つて過ごして来たけれども、今から考えると、私は自分に最も性の合わない人を選んだらしい。これが定められた夫であると思うから仕方なく悩んでいるものの、私は時々彼に面と向かつて見て、何という理由もなしに胸がムカムカして来ることがある。そう、そのムカムカする感じは、昨今に始まつたことではなく、そもそも結婚の第一夜、彼と褥を共にしたあの晩からそうであつた。あの遠い昔の新婚旅行の晩、私は寢床にはいつて、彼が顔から近眼の眼鏡を外したのを見ると、とたんにゾウツと身慄いがしたことを、今も明瞭に思い出す。始終眼鏡をかけている人が外すと、誰でもちよつと妙な顔になるものだが、夫の顔は急に白ツチャけた、死人の顔のように見えた。夫はその顔を近々と傍に寄せて、穴の開くほど私の顔を覗き込んだものだった。私も自然彼の顔をマジマジと見据える結果になったが、その肌理の細かい、アルミニウムのようにツルツルした皮膚を見ると、私はもう一度ゾウツとした。昼間は分からなかつたけれども、鼻の下や唇の周りに髯が微かに生えかかっているのが（彼は毛深いたちなのである）見えて、それがまた薄気味が悪かつた。私はそんなに近い所で男性の顔を見るのは始めてだったので、そのせいもあつたかも知れないが、以来私は、今日でも夫の顔を明るい所で長い間視つてみると、あのゾウツとする気持になるのである。だから私は彼の顔を見ないようにしよう

と思ひ、枕もとの電燈を消そうとするのだが、夫は反対に、あの時に限つて部屋を明るくしようとする。そして私の体じゅうのここかしこを、能う限りハッキリ見ようとする。（私はそんな要求にはめつたに應じないことにしているけれども、足だけはあまり執拗く云うので、已むを得ず見せる）私は夫以外の男を知らないけれども、総体に男性というものは皆あのように執拗いのであろうか。あのアクドいべたべたと纏わりついてさまゝな必要以外の遊戯をしたがる習性は、すべての男子に通有なのであろうか。……

一月七日。……今日木村ガ年始ニ来タ。僕ハフオークナノサンクチュアリヲ読ミカケテイタノデ、チヨット挨拶シテ書齋ニ上ガッタ。木村ハ茶ノ間デ妻ヤ敏子ト暫ク話シテイタガ、三時過ギニ、麗しのサブリナニ見ニ行クト云ツテ、三人デ出カケタ。ソシテ木村ハ六時ゴロマター一緒ニ歸ツテ来テ、僕ラ家族ト夕食ヲ共ニシ、九時少シ過ギマデ話シテ行ツタ。食事ノ時敏子ヲ除ク三人ハブランデーヲ少量ズツ飲ンダ。郁子ハ近頃酒量ガヤヤ増シタヨウニ思ワ。彼女ニ酒ヲ仕込ンダノハ僕ダガ、モトモト彼女ハ行ケル口ナノダ。彼女ハ勸メラレレバ黙ツテカナリノ量ヲ嗜ム。酔ウハ酔ウガ、ソノ酔イ方ガ陰性デ、外ニ発セズ、内攻シ、イツマデモジツト泳エテイルノデ、人ニハ分カラナイノガ多イ。今夜ハ木村ガシェリーグラスニ二杯半マデ彼女ニスメタ。妻ハイクラカ青イ顔ヲシテイタガ、酔ツタ様子ハ



見エナカッタ。カエツテ僕ヤ木村ノ方ガ紅^{あか}い顔ニナツタ。木村ハソソナニ強クハナイ。妻ヨリ弱イクライデアル。妻ガ僕以外ノ男カラブランデーノ杯ヲ受ケタノハ、今夜ガ始メテデハナイダロウカ。木村ハ最初敏子ニ差シタノダガ、「私ハダメデス、ドウカママニオ酌^{しやく}ナスツテ」ト敏子ガ云ツタカラデアッタ。僕ハカネテカラ、敏子ガ木村ヲ避ケル風ガアルヲ感ジテイタガ、ソレハ木村ガ彼女ヨリハ彼女ノ母ニ親愛ノ情ヲ示ス傾向ガアルヲ、彼女モ感ゾクニ至ツタカラデハナイデアロウカ。僕ハ僕ノ嫉妬^{しと}カラソソナ風ニ氣ガ廻^{まわ}ルノカト思ツテ、ソノ考エヲ努メテ打ち消シテイタノデアルガ、ヤハリソウデハナサソウデアル。一体妻ハ来客ニ対シテハ不愛想^{ふあいそう}デ、コトニ男ノ客人ニハ会イタガラナイノデアルガ、木村ニダケハ親シムノデアル。敏子モ、妻モ、僕モ、イマダカツテロニ出シタヲハナイガ、木村ハジエームス・スチュアートニ似テイル。ソシテ僕ノ妻ハ、ジエームス・スチュアートガ好キデアルヲ僕ハ知ツテイル。（妻ハソレヲロニ出シタヲハナイガ、ジエームス・スチュアートノ映画ダト缺^かカサズ見ニ行クラシイノデアル）モットモ妻ガ木村ニ接近スルノハ、僕ガ彼ヲ敏子ニ妻^{めづ}ワセテハドウカトイウ考エガアツテ、家庭ニ出入リサセルヨウニシ、妻ニソレトナク二人ノ様子ヲ見ルヨウニト命ジタカラナノデアル。トコロガ敏子ハコノ縁談ニハドウモ氣乗リガシテイナイラシイ。彼女ハナルベク木村ト二人キリニナル機会ヲ作ラスヨウニシ、イツモ殆^{ほと}ソンド郁子ト三人デ茶ノ間デ話

シ、映画ヲ見ルニモ必ズ母ヲ誘ツテ出カケル。「オ前ガツイテ行クカラ悪い、二人キリデ出シテミナサイ」ト云ウノダガ、妻ハソレニハ不賛成デ、母親トシテ監督スル責任ガアルト云ウ。「ソレハオ前ノ頭ガ時代オクレダカラダ、二人ヲ信用シタラヨイノダ」ト云ウト、「私モソウ思ウノデスケレドモ、敏子ガツイテ来テクレト云ウノデス」ト云ウ。事實敏子ガソウ云ウノダトスレバ、ソレハ自分ヨリモ母ノ方ガ木村ヲ好イテイルトコロカラ、ムシロ自分ガ母ノタメニ仲介ノ勞ヲ取ロウシテイイルノデハアルマイカ。僕ハ何トナク、妻ト敏子トノ間ニ暗黙ノ示シ合ワセガアルヨウナ氣ガシテナラナイ。少ナクトモ妻ハ、自分デハ意識シテイイルノカモ知レナイガ、自分デハ若イ二人ヲ監督シテイイルツモリカモ知レナイガ、實際ハ木村ヲ愛シテイイルヨウニ思エテナラナイ。……

一月八日。昨夜は私も酔ったけれども、夫は一層酔っていた。夫は近頃あまり強要したことになかった眼鏡の上の接吻を、してくれるようにとしきりに迫った。私もブランデーの加減で少し常軌を逸していたので、フラフラと要求に応じた。それはよいが、接吻するついでに、あの見てはならないものを、——彼の眼鏡を外した顔を、ついウツカリして見てしまった。私はいつも眼鏡に接吻を与える時は、自分も眼をつぶるようにしているのだが、昨夜は途中で眼を開けてしまった。あのアルミニウムのような皮膚

が、キネマスコープで大映しにして見るように巨大に私の眼の前に立ち塞がった。私はゾウツと身慄いした。そして自分の顔が急に青ざめたのを感じた。でもよいあੰばいに、夫は眼鏡をすぐにかけた、例によって私の手足を事細かに眺めるために。……私は黙って枕もとのスタンドを消した。夫は手を伸ばしてスイッチをひねり返そうとしたが、私はスタンドを遠くの方へ押しやった。「おい、後生だ、もう一度見せてくれ。後生お願い。……」と、夫は暗い中でスタンドを探ったが、見つからないので諦めてしまった。……久しぶりの長い抱擁。……

私は夫を半分は激しく嫌い、半分は激しく愛している。私は夫とほんとうは性が合わないのだけれども、だからと云って他の人を愛する気にはなれない。私には古い貞操観念がこびり着いているので、それに背くことは生まれつきできない。私は夫のあの執拗な、あの変態的な愛撫の仕方にはホトホト当惑するけれども、そう云っても彼が熱狂的に私を愛していてくれることは明らかなので、それに対して何とか私も報いるところがなければすまないと思う。あ、それにつけても、彼にもう少し昔のような体力があつてくれたらば、……一体どうして彼はあんなにあの方面の精力が減退したのであろうか。……彼に云わせると、それは私があまり淫蕩に過ぎるので、自分もそれにすり込まれて節度を失った結果である、女はその点不死身だけれども、男は頭を使うので、ああいうことがじきに体にこたえるの

だと云う。そう云われると恥ずかしいが、しかし私の淫蕩は體質的のもので、自分でもいかんともすることができないことは、夫も察してくれるであろう。夫が真に私を愛しているのならば、やはり何とかして私を喜ばしてくれないといけない。ただくれぐれも知っておいてもらいたいののは、あの不必要な悪ふざけだけは我慢がならないということ、私にとつてあんな遊びは何の足しにもならないばかりか、かえつて気分を損うばかりだということ、私は本来は、どこまでも昔風に、暗い奥深い闇の中に垂れ籠めて、分厚い褥に身を埋めて、夫の顔も自分の顔も分らないようににして、ひっそりと事を行ないたいのだということ、である。夫婦の趣味がこの点でひどく食い違っているのはこの上もない不幸であるが、お互いに何か妥協点を見出す工夫はないものだろうか。……

一月十三日。……四時半ごろニ木村ガ来タ。国カラ鱈子ガ届キマシタカラ持ッテ来マシタト云ッテ、ソノアト一時間ホド三人デ話シテ婦リカケル様子ダッタノデ、僕ハ下ヘ降りテ行ッテ、飯ヲ食ッテ行ケト引キ留メタ。木村ハ別ニ辞退セス、デハ御馳走ニナリマスト云ッテ坐リ込ンダ。食事ノ支度ガ出来ル間、僕ハマタ二階ニ上ガッテイタガ、敏子ガ一人デ台所ノ用事ヲ引キ受ケテ、妻ハ茶ノ間ニ残ッテイタ。御馳走ト云ッテモ有リアワセノモノシカナカッタガ、酒ノ肴ニハ到来ノ鱈子ト、昨日妻ガ錦ノ市場デ買ッテ来タ

鮎鮎ガアッタノデ、スグブランデーニナツタ。妻ハ甘い物

ガ嫌イデ、酒飲ミノ好ク物ガ好キ、ナカンズク鮎鮎ガ好キ

ダ。——僕ハ両刀使イダケレドモ、鮎鮎ハアマリ好キデ

ナイ。家ジエウデ妻以外ニアレヲ食ウ者ハイナイ。長崎人ノ

木村モ鱧子ハ好キダガ、鮎鮎ハ御免ダト云ツテイタ。

木村ハ土産物ナンカ提ゲテ来タノハナイノダガ、今日ハ始

メカラ晩ノ食事ヲ共ニスル底意ガアツタノデアロウ。僕ハ

彼ノ心理状態ガ今ノトコロヨク分カラナイ。郁子ト敏子ト

彼自身ハドツチニ惹カレテイルノデアロウカ。モシ僕ガ木

村デアツタトシテ、ドツチニヨケイ惹キ付ケラレルカト云

エバ、ソレハ、年ハ取ツテイルケレドモ母ノ方デアアルハ確

カダ。ダガ木村ハドウトモ云エナイ。彼ノ最後ノ目的ハカ

エツテ敏子ニアルノカモ知レナイ。敏子ガソレホド彼トノ

結婚ニ乗り氣デナイラシイノデ、サシアタリ母ノ歎心ヲ買

イ、母ヲ通ジテ敏子ヲ勸カソウトシテイル?——イヤソ

ンナノヨリモ、僕自身ハドンナツモリナノダロウ。ドンナ

ツモリデ今夜モ木村ヲ引キ留メタノダロウ。コノ心理ハ我

ナガラ奇妙ダ。先日、七日ノ晩ニ僕ハスデニ木村ニ対シ淡

イ嫉妬(淡クモナカッタカモ知レナイ)ヲ感ジツツアツタ

ノニ、——イヤソウデハナイ、ソレハ去年ノ暮アタリカ

ラダツタ、——ソノ半面、僕ハソノ嫉妬ヲ密カニ享樂シ

ツツアツタ、ト云エナイダロウカ。元来僕ハ嫉妬ヲ感シル

トアノ方ノ衝動ガ起コルノデアル。ダカラ嫉妬ハ或ル意味

対スル嫉妬ヲ利用シテ妻ヲ喜バスニ成功シタ。僕ハ今後

我々夫婦ノ性生活ヲ満足ニ統ケテ行クタメニハ、木村トイ

ウ刺戟劑ノ存在ガ缺クベカラザルモノデアアルヲ知ルニ至

ツタ。シカシ妻ニ注意シタイノハ、云ウマデモナイヲダケ

レドモ、刺戟劑トシテ利用スル範圍ヲ逸脱シナイヲダ。妻

ハ随分キワドイトコロマデ行ツテヨイ。キワドケレバキワ

ドイホドヨイ。僕ハ僕ヲ、氣ガ狂ウホド嫉妬サセテ欲シイ

事ニヨツタラ範圍ヲ踏ミ越エタノデハアルマイカ、ト、多

少疑イヲ抱カセルクライデアツテモヨイ。ソノクライマデ

行クヲ望ム。僕ガコノクライニ云ツテモ、トテモ彼女ハ

大胆ナノハデキソウモナイケレドモ、ソウイウ風ニシテ努

メテ僕ヲ刺戟シテクレルヲハ、彼女自身ノ幸福ノタメデモ

アルト思ツテモライタイ。

一月十七日。……木村ハアレキリマダ来ナイガ、僕ト

妻トハアレカラ毎晩ブランデーヲ用イツツアル。妻ハス

メレバ随分行ケル。僕ハ妻ガ一生懸命酔イヲ隠シテ冷タイ

青ザメタ顔ヲシテイルノヲ見ルノガ好キダ。妻ノソウシテ

イル様子ニ何トモ云エナイ色氣ヲ感ジル。僕ハ彼女ヲ酔イ

ツフシテ寝カシテシマオウトイウ底意モアツタガ、ドウシ

テ彼女ハソノ手ニハ乗ラナイ。酔ウトマスノ意地ガ悪ク

ナリ、足ニ触ラセマイトスル。ソシテ自分ノ欲スルヲダケ

ヲ要求スル。……